

1 授業実践のゴールイメージ

藤原伊周の人物像について、大鏡や栄花物語といった歴史書に描かれたものと、中関白家側である枕草子に描かれたものを比べ読みすることによって、作品や文章には書き手の主観や立場・意図等が反映されるものだということを知り、今後の読書活動（時代・ジャンルを問わず）において、書かれたものの歴史的・文化的背景や作者の立場・意図等を考えて読めるようになるためのきっかけとする。

2 単元の流れ

第一次…『大鏡』『競べ弓』を読み、ジグソー法を用い、藤原道長、藤原道隆、藤原伊周の人物像を読み取る。（この後、藤原伊周の人物像に焦点をあてていく）

第二次…『栄花物語』『大鏡』における藤原伊周の人物像を読み取る。

※ここまでは、伊周のマイナスイメージばかりが描かれた文章を読ませる。

第三次…『枕草子』『大納言参り給ひて』を読み、伊周の人物像を読み取る。

※ここでは、伊周は中関白家の貴公子としてプラスイメージで描かれている。

『栄花物語』『大鏡』との描かれ方の違いを確認し、なぜこんなにも描かれ方が違うのかを考察し、文章には書き手の立場・意図が反映されること、今後古典を読むときに気をつけるべきことについて話し合う。

3 授業後の生徒の感想

○一人の人間に対しても、書物によって色々な書かれ方をされていて、どの情報を信じればよいのかわからなくなった。これは現代におけるメディアの情報発信においても言えることなのではないかと思うので、僕は様々な情報を冷静に比較して物事が考えられるようになりたい。

○書かれていることが全てではない。沛公たちの物語もそうだし、今回の伊周たちの話もそうだけど、書き手のイメージによって、作品の中の人物像は大きく左右されるので、これからは「本当にそうなのかな？」と思いながら古典を読んでいきたい。

○中心となる人物の最終的な立場で、人物像の書かれ方が違うので、物語の始めにプラスな感じで書かれていたら、その人は、今後権力を持つ、など、推測しながら読みたい。

4 研究協議における先生方のご意見

○「深い学び」というものをどのように授業の中で実現させれば良いのか、授業を通して見えた気がした。ゴールイメージが具体的でないと、授業もぼんやりした内容になってしまうということを痛感した。

○一つの単元に他の教材も加えて授業するスタイルは、今からの国語教育に必要なようになってくるものだと改めて感じた。比較することで、何が問題視されるのか、また、どういう違いがあるのかを、生徒に気付かせることの大切さを今一度考えることができた。

○生徒から疑問を出させて議論させて考えを深めさせていくべきところを、先生が説明してしまったのが非常にもったいないと感じた。

5 授業実践の感想

「主体的・対話的で深い学び」の授業を実践する前に、まずは新学習指導要領における「言語文化」の授業はどのようなものなのかを知ることからのスタートであった。国語は全科目の新設という大規模な改訂がなされた。今回の研修がなければ、目の前の仕事を言い訳に、恥ずかしながら全く新学習指導要領について学ばないままであったと思う。5月の事前研修では全く具体的イメージがつかめていなかったが、7月の第一回パイロット教員授業公開、8月の教育課程説明会での研究協議を経て、意外と、今まで実践してきた授業の延長上にあるものではないか、と思うようになった。それでも実際に授業を組み立てるまでに、何冊もの古典・研究文献・新学習指導要領についての書籍を読んだ。全単元、毎時間、授業には力を入れて取り組んでいるつもりであったが、今回の実践を通し、授業はアイデアと計画が一番大事であると痛感した。何を、どう教えれば、生徒の心をつかみ、生徒の力を伸ばすことができるのか。今後も手を抜くことなく授業づくりに取り組んでいきたいと思う。